

高橋玄洋

蝶たちの冬



蝶たちの冬

高橋玄洋

作品社



高橋玄洋（たかはし・げんよう）
一九二九年、広島県に生まれる。
本名 玄洋（つねひろ）。一九五四年、早稲田大学国文科卒業。日本教育テレビ演出部を経て、一九六二年より、テレビドラマを主に作家活動に入る。主なテレビドラマに『傷痕』（一九六〇年、芸術祭奨励賞受賞）『判決』（一九六二―六五年、テレビ記者会賞受賞）『いのちある日を』（一九六七年、久保田万太郎賞受賞）などがあり、また、『蘭子ひとり』で一九七二年度芸術選奨文部大臣賞を受賞する。著書に『志都という女』（小説）『花を見るかな』（評伝）などがある。

蝶たちの冬

一九七九年一月二〇日第一刷印刷
一九七九年一月二五日第一刷発行

定価九八〇円

著者 高橋 玄洋

発行者 寺 田 博

発行所 株式会社 作品社

東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四
〒三三 電話〇三二六二一九七五三
振替口座（東京）六二七一八三

印刷・製本 図書印刷

（落・乱丁本はお取替え致します）

蝶たちの冬——目次

翳
り

解らぬ男

同窓会

春一番

上
京

北西の風

濁った沼

7

33

44

63

92

121

154

ちぎれ雲

187

夕暮れの道

226

ふるさと

258

旅人

281

秋の孵化

307

風に向かって

349

装丁菊地信義

蝶螺鈿蒔絵手箱・蓋裏・部分
(畠山記念館蔵)

蝶たちの冬

翳り

突然、光の矢が束になって襲いかかって来る夢にうなされて目を覚ますと、朝の赤い陽が、顔いっぱい射していた。

「……………」

伊都子は、おもちゃのピノキオのように起き上がると、急いで窓をあけに立った。十五分もすると、またビルの陰に隠れてしまうこの部屋には貴重な日光なのだ。

「おお寒ッ」

ひとりで言つて、あわててベッドにもどった。冷めた肌を、もう一度自分の温もりの中に浸すのは、ひとり居のささやかな幸せである。

へあッそうだった

ようやく頭がハッキリしてきて、伊都子は今日が大事な日だったのを思い出した。

次郎太と会うのだ。

仲根次郎太から誘われ、改まって二人だけで会うのは初めてのことである。思っただけで、乳

の底がキュッと鳴った。首をひねると、時計は八時を回ったところである。

伊都子は、思い切りよく起き出すと、開放した日光にその胸をさらして急いで着替え、扉の下から新聞を抜いた。それを待っていたように、扉がたたかれた。

「……………」

こんな時間に誰だろう。思わず用心深い声になった。

「何でしょうか」

「私です。能登の春代です」

「まあっ」急いで開けると、石津春代が輝あかりの頬で立っていた。「どうしたの春チャン？　びっくりするじゃないの、いつ出て来たの？　今朝着いたの？」

伊都子の矢継ぎ早の質問に、

「東京も朝は寒いんですね」春代はとぼけた返事をした。

「寝てるみたいだったから、表で待ってたの」

「まあ、起こせばいいのに」

春代は、まだつけたばかりの炬燵こたてに腰まで突っこむと、

「新宿じゃ、お日さま横に昇るんですね」とつぶやいた。

ここでは、朝日は、高層ビルの壁から横に出て来る。伊都子もここに引っ越して来た当時驚いたものだった。

「おたくの皆さん、お元気？」

「ハイ、よろしくと言っていました。金沢のおねえさんのお家にも寄って来ました。皆さん、お元

「氣そうでした」

春代は、四年前まで伊都子の実家から金沢の学校に通いながら、行儀見習いのようなことをしていた能登の漁師の娘である。

「そう。私のこと、困ったやつだって言ってたでしょう」春代は、返事の代わりにみやげの菓子折を出し、それと一緒に白い封筒を置いた。「これを伊丹のおじいちゃんから預かりました」

「春チャン、伊丹のおじいさんのお使いで出て来たの？」

伊丹豊年は、伊都子のいわばパトロンである。いやな予感がして、伊都子は思わず春代の顔を見すえていた。

「いいえ。でも、そういうことになるのかしら」

その春代の顔は、もう昔の少女ではなかった。立派な女の顔をしている。

春代が能登の穴水から運んで来た伊丹豊年の手紙には、春代をよろしく頼む、という簡単な文面に、小切手が一枚添えてあった。小切手には「当分の用として」と鉛筆の走り書きがあり、額は五十万だった。

「これどういうこと？ 詳しく話してよ」伊都子は、内心を見透かされそうな気がして、努めて優しく聞いた。「春チャンから、東京へ行ってみたいって言ったの？」

「そういうわけじゃないんだけど、私、前から東京に来たいと思ってたから、よく肩をもむ時に話してたの。そしたら、この間突然、今でも東京に行きたいと思ってるか、って」

「それで行って来いってことになったのね」

春代の土産の鮑が、能登の磯の香りを伝えていた。

伊都子が、春代の来訪にハッと胸をつまらせたのは、次郎太とのことをもう能登の豊年に勘づかれたか、と思ったからである。

確かに、伊丹豊年には、そんな超能力的なところがある。伊都子は、過去何度もそんな場面に居合わせ、そんな豊年をこわいと思ったこともたびたびだった。六十五歳にもなって、いかにも艶がよく、若々しいのは、そのためかも知れないと思ったりする。次郎太との間に、まだ何があったわけでもないのに、伊都子の内心をもう察知して、春代を監視役に寄こしたのではないか、まじめにそう思ったのだった。

ド、ドンッ

部屋全体をゆすられて、伊都子はわれにかえた。

高層ビルが巻き起こす突風が、ときどきこうして、この西新宿と呼ばれる一帯のアパート群を襲う。それは突然、たたきのめすようにやって来た。

「地震かと思った」春代は、オーバーに反りかえって驚いてみせた。昔は可愛いと思ったそんな表情が、今日は何となく白々しい。せつかくの恋の門出にケチがついた感じだ。

「約束でこれから出掛けなきゃならないの。悪いけど、春チャン留守番してて」

「あたし、ひとりでいいんですか」

「別に春チャンに見られて困るようなものもないわ」ついトゲのある言い方になった。

伊都子が外出の支度を始めると、春代は、わざと気にしてないところを見せるように、ファッション雑誌をめくった。しかし、春代に見られていると思うと、念入りの化粧も気がとがめる。それ以上に、春代の顔色をうかがっている自分に伊都子はイライラしていた。

「行つてらっしゃい」春代は、もうこの部屋になじんで、伊都子を送り出す顔をしている。石津春代はそんな子なのだ。

風はあったが、ひなたは暖かった。伊都子は、風を切つて歩きながら、一步踏み出した自分を感じていた。春代が、どんな報告を能登の豊年に送ろうと知ったことではない。あたしはあたしの道を進むだけだ。そう思いながらも、豊年の手紙の一節が肩の辺りにひっかかっていた。

——出来ることなら、能登の春代から渋皮をむき、垢抜けした東京の春代にしてやつて下さい——

気になるのは、矢つ張り春代への嫉妬だろうか。

ビル嵐にフレイヤーのスカートを押さえて、待ち合わせのホテルのロビーに入っていくと、次郎太の姿はまだなかった。

次郎太と待ち合わせたホテルのロビーは、新宿副都心、高層ビルの一階にあった。一階といっても東と西の面から入るからで、南北でみると三階にあたるという複雑な構造になっており、北と西の壁が総ガラスになっていて、ガラスの外に人工の滝と池が見えた。

待ち合わせにここを指定したのは伊都子の方である。伊都子は仕事の打ち合わせにもよくここを使う。アパートの部屋からも近かったし、地味だが豪華なふんいきがあり、ことに冬の夕暮れどきなどには、富士山が遠くシルエットに浮かぶこともあり、東京での数少ないお気に入りの場所の一つである。しかし、今日の待ち合わせをここにしたのを、伊都子は後悔していた。へこんなに明るかったかしら——今まで何度来ても、思ってもみなかった引け目を伊都子は初めて覚

えていた。

若く見えたが伊都子は、もう三十歳である。三十代の隠し切れない素顔を一番よく知っているのも伊都子自身であった。まして、今日は若い石津春代の出現で、それをいやというほど知らされていた。伊都子は、西側のガラスを背負う椅子に坐り直した。これなら逆光でいくらか救われるに違いない。襟足のホクロが逆光で光る。

次郎太は、十分ほど遅れて現れた。フロントの前を、やせた長身が大股に抜けて、三段ほど降りなければならぬロビーの入り口に突っ立って鶴の首を回している。

伊都子は、思わずうつむいて彼に探し当てられるのを待った。

「大原さん」次郎太は、伊都子の姓の方を呼んで、彼女の前にドカンと坐った。「今、この車寄せで、おばちゃんが帽子を飛ばしてね、これが面白いほど転がってね。手が届きそうになると、もう一步のところでまた転がるんだ。やっと追いつく、また逃げる、おばちゃんは奇声をあげるし、いやおかしいのなんの、見せたかったよ」

次郎太の睡がコーヒー茶碗まで飛びそうだった。

「まあ、お気の毒に。仲根さん、黙って見てらしたの？」

「声は出さなかったろうな。追っかける方に懸命だったから」

「えッ帽子を追っかけたの、仲根さん？」

「そうだよ」次郎太は、どうしてそんなことを聞くのか、という顔をしてから、「ああ、おばちゃんが追っかけたんだと思った？」と、つけ足した。

「だって、仲根さんの話、主語が抜けるんだもの。それにおかしいのなんのって……」

「自分で自分がおかしかったんだ。今度こそと思うのに、すんでのところで逃げ出すだろ、それもこつちをからかうようにさ」

「もちろん、拾えたんでしょ」

「ああ」

「喜ばれたでしょう」

「その前に、タクシーの運転手にどなられたよ」

まあッと、次郎太のつるりと白い手の甲を眺めながら、伊都子は、いかにも次郎太らしいと思う。長身を折り曲げて転がる帽子を追っかけている次郎太が目に見えるようだ。へ鶴の駆けつこみたいだったに違いない」

「そのおぼちゃん、おれを抱いてキスしたよ」

「えッその人、外人なの？」

「アメリカからの観光客らしい。言わなかった？」

「聞かないわ」

「この英語が早口で、からきしわからない。礼を言ってることだけは、動作や表情でわかるんだが」

「それでよくアメリカの人だってわかったわね」

「イギリスの英語ならわかるはずだよ」次郎太は、当然という顔をして言う。「あれはアメリカの鹿児島弁だな」

伊都子は、思わず吹き出していた。アメリカの鹿児島弁という言い方もおかしかったが、それ

以上に、抑揚をつけない次郎太の言い方が、彼ののっぺりした顔に、ぴったりだったからである。馬面というほど長くはないのに、次郎太の顔は、どこか間延びしてみえる。鼻筋の通りがよすぎて、音楽でいうと、半音分だけ余計な感じがする。それを助長するのが下がり気味の太い眉で、目尻の皺にだけ神経質さがあって、彼の中で伊都子の一番気に入っているのは、その目元だった。

へどこにキスされたの？

伊都子は、よほど聞きたかったが、はしたない気がして思い止まった。その代わりに、「どこに行きましょう」と聞き、これも先を急いでいるようにとられはしないかと、あわてて、「お昼まだでしょ」

頬を染めて言い足した。

「ああ、もちろん」チョッキのポケットから真鍮しんちゆうのライターを取り出して煙草をつけた。

「じゃ、ここの四十八階にちょっと落ち着けるレストランがあるの。窓側だと東京の街が一望にながめられるわ」

「このうえ、まだ東京をながめたい？」次郎太は、太くて短い、それでいて下がり気味の眉の間に皺を作って言う。

「仲根さん、高所恐怖症？」

「そうじゃないさ。そうじゃないけど、わざわざ高い所へ登って今さら東京のなにをながめるのさ」

「それもそうね」天の邪鬼なんだから、と思いながら、伊都子はあえて逆らわないことにした。